すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2020.8
217号

■特集／ふるさと三重の民話

特集

ふるさと三重の民話

ふるさと三重には数多くの民話があります。野山、海、川にまつわるお話しを聞けば、誰もが童心に帰ってしまうことでしょう。

※今回は過去に掲載した特集の中から抜粋し、再構成して制作しています。
※文体、漢字・仮名使いは原文を尊重し、掲載時に準じています。

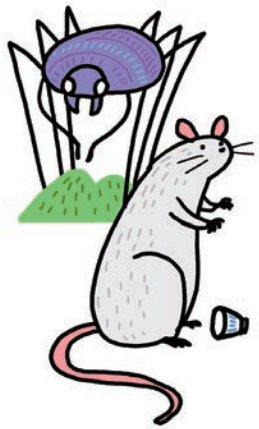
イラスト…柚木 美里

ほら久（きゅう）

【尾鷲市】

むかし、むかしのことだ。長島浦（ながしまうら）に、ほら久（きゅう）とよばれる〝ほら〟の名人がいた。たとえば、ある人が、「ゆんべ、どえらっくたい（たいへん大きい）ネズミをとったで。イタチくらいあった。」というと、ほら久は、「なんの、おらとこでつかまえたネズミは、犬くらいあったでえ。」と、いいかえす。

「ゆんべ、えらい風やったのう。」と、はなしかけると、「ほんとじゃ。あの〝まぜ〟（南風）で、大島（おおしま）がだいぶ、こっちゃへよってきたのう。」と、すましている。



ある日のこと、大きなクモを見た人が「ほら久、てのひらくらいある、クモを見たでえ。」というと、「なんのなんの。おらの見たクモは、なんと、その巣のはしからはしまで、十八里（一里は約4キロメートル）もあったでえ。」と、ほら久がいいだした。

いくらなんでも話が大きすぎると、その人、「おまえ、それは、〝ほら〟にしてもでたらめすぎる。おれをあんまりばかにするなあ。」と、顔色をかえておこりだしたんで、ほら久、あわてていいわけしたそうな。

「いや、この話だけはほんとのこと。クモの巣がクリの木とクリの木のあいだにはられとったんじゃい。クリ（九里）とクリ（九里）をたしてみやんせ、あわせて十八里じゃ。」

このほら久が、あるとき赤羽川（あかばがわ）の渡しで、すこしばかり大きなウナギをつりあげた。さあ、〝ほら〟をふくのふかないの。

あう人ごとに、こういうたそうな。

「おたがつったウナギ、頭は牛の頭くらいもあったかなあ。川からひきあげるときは、馬にまきつけて、てつどてもろうた。ようやっとウナギの頭を、半里はなれた二郷（にごう）の宮（みや）さんのスギの木にゆわえつけたんやが、からだをくねらすたびにスギの木が大ゆれしてなあ。木の上にとまっとったカラスが、びっくりしてとびあがりよった。そんでも、尾っぽはまだ川岸の石垣のとこにあったもんなあ。」

「すばらしきみえ No.2」昭和59（1984）年12月から

こない若衆【度会郡】

むかし、むかし、あるところに美しいお姫さまがいました。

このお姫さまは、なんでも龍宮からおいでになったのだということで、村の人々もたいそうもてなしをしていました。

お姫さまはときどき、海のかなたにある龍宮に行かれました。ある年の暮れ、お姫さまはいつものように家を空けられましたが、今度はなかなかお帰りになりませんでした。村の若衆たちは、まだかまだかと、お帰りを待っていました。

もう明日はお正月だという日になって、お姫さまはひょっこりとお帰りになりました。若衆たちが、「こんなに長くどこへ行かれたのですか。」と聞くと、お姫さまは、「龍宮城から呼ばれたので行っていました。」といわれます。

「私たちも一度、龍宮城へ連れて行ってください。」

「今年はもう行けないから、明年になったら一度、連れて行ってあげましょう。」

「いったい龍宮城とはどんなところですか。」

「それはそれは立派なところです。きれいな建物が何百何十何里も長くつづいているところです。その中には美しい一人のお姫さまと、大ぜいの女官がいます。あなた方が行かれたら、きっとみんな喜ぶことでしょう。」

聞いていた若衆たちは、ますます龍宮城へ行きたくなりました。

年が明けて、若衆の一人がいよいよ龍宮城へ行くことになりました。

海べに出て、舟に乗るのか、亀にまたがるのか、困っていますと、一匹のサメがあらわれて、「わたしの背中に乗って行きなさい。」といいました。そして、「わたしの背中はツルツルすべりますから、気をつけて乗ってください。」といいます。

若衆がどうしようかと考えこんでいるところへ、今度は海蛇が来ました。そして、「わしの白い尾っぽで、ぐるぐる巻いて行きなさい。」といいました。

すると、サメは、「わたしは白い海蛇はだいきらいだから、いっしょに行くのはいやだ。」といって、海の中へ引っこんでしまいました。

若衆は龍宮城へ行く乗り物がなく、海べに立ちすくんだままでした。

さて、龍宮城では、村の若衆があそびに来るというので大さわぎです。花かざりをしたり、大きな歓迎の門を建てたりして、待っていました。

そこへ、とつぜん陸のお姫さまだけがやって来ました

龍宮城の人たちが、「どうして村の若衆は来ないのか。」とたずねますと、お姫さまは、「村の若衆の名は木内といいますので。」とお答えになりました。

「それではこないはずだよ。」といって、一同大笑いになりました。

「すばらしきみえ No.33」平成2(1990)年2月から

かんからこぼし

【北牟婁郡】

むかし、むかし、このあたりに「かんからこぼし(河童)」が住んでいました。

ある日のこと、港治郎左衛門というご隠居が、熊野の本宮からやって来ました。海べに行ってあたりを眺めていますと、「かんからこぼし」が、海から陸のほうへのっそりと上って来ました。

治郎左衛門が、「おまえの名は何というのやあ」と聞きました。

すると、「わしは、伊勢では川原小僧というてなあ、志摩の国では『こぼし』というてなあ、ここへ来ると、みんなから、『かんからこぼし』と余分な名前で呼ばれるのやあ」と答えました。

「かんからこぼし」は、髪の毛が四、五寸はえ、爪は猫のように鋭く、歯は亀のように上下四枚、背中は亀の甲のようで、脇腹には軟らかな縦の筋があり、お尻の先はとがって四、五寸ほどの尾になっていました。

「かんからこぼし」は、治郎左衛門に、「すもうを取ってみようか」といいました。治郎左衛門はなかなかおもしろい人で、「なになに、そんな小さいおまえさんに、すもうなんか取れるもんか」とからかいますと、かんからこぼしは、「わしに勝ったら、浜木綿の花を、あの島に植えてやろう」といいました。

さあ、一大事です。浜木綿の花は万病をなおす薬で、そうあちこちにある花ではありません。治郎左衛門は、力のかぎりをつくしてすもうを取り、「かんからこぼし」を倒しました。「かんからこぼし」はくやしがりましたが、とうとう約束どおり、浜木綿を植えることになりました。

これが今、長島の沖にある大島の浜木綿だということです。

しばらくたったある真夏の昼ごろ、治郎左衛門が馬にまたがって、遠乗りの帰り道に赤羽川の堤の上を通っていますと、川尻の口で馬がとつぜんあばれだしました。「いたい、いたい」といって、いななきます。

何事だろうと、治郎左衛門が不思議に思ってよく見ますと、馬の後足に、異様な怪物が食らいついています。

「なんだ、きさまはこの間すもうを取った『かんからこぼし』か」といいますと、「今度は馬とすもうして勝ってやろうと思ったんじゃ」というのです。

治郎左衛門は「かんからこぼし」を家に連れて帰り、お酒を飲ましたりしていろいろともてなしてやりました。

それからまた、6月14日の白浦の「天王祭」に、治郎左衛門がお参りに行きますと、うしろから、「かんからこぼし」がお参りに来ました。

そうして小声で、「龍宮のお使いで、人間の生き肝を三つ取りに来ました。」といいます。

治郎左衛門が大声で、「馬鹿もの」とどなりますと、大急ぎで海の中へもぐって行きました。

それっきり、「かんからこぼし」は陸へ上って来ませんでした。

その後、この村では男の子が生まれると、さっそく正月15日に母親に抱かれて治郎左衛門の家にお酒を持って行き、お酒をくみかわすようになりました。

「かんからこぼし」に生き肝を抜かれないように、というわけでしょう。

「すばらしきみえ No.33」平成2(1990)年2月から

コイとサルと馬の伊勢まいり【伊賀市】

むかし、山の中にサルとコイがくらしていたと。

あるとき、コイがサルにいうのには、「一どでいいから伊勢まいりをしたいもんじゃ。」

それをきいてサルがいうのには、「そうよなあ、わしも、ひまでたいくつしよったところだから、いっしょにまいろうかい。」

そこで、サルは木から木へとびうつりながら、コイは川の中をおよいで、山をくだっていった。

山をおりると、ひろい野原がひろがっていた。すると、サルが心ぼそそうにコイにむかっていうたと。

「わしは、山の中はへいきやけど、平地をあるくのは、どうもあかんわね。」

「そいつはこまったなあ。せっかくここまできたのになあ。」

すると、そこへ馬がとおりかかって、きいた。

「どうしたんかね。」

「じつは、こうこう、こういうわけで。」

コイがわけをはなすと、馬がいうのには、「ほう、それはかんしんな。そんなことならサルさん、わしの背にのんなされ。わしも、一ど伊勢まいりしようとおもうてたところやから、いっしょにいこう。」

こうして、サルを背中にのせた馬が道をあるき、コイはあいかわらず川の中をおよぎながら、旅をつづけたそうな。

しばらくいくとひろい海が見えてきた。すると、こんどはコイが、心ぼそそうにいうのには、「この川は、もうすぐ海にながれこむ。わしゃ、海の水はにがてじゃ。しおからくて、とてもおよげんわよ。」

そこで、コイとサルと馬は、また、そうだんをはじめたと。はじめにサルがいうのには、「こうしたらどうじゃろ。わしがどっからか手おけを見つけてくるから、コイさんをその中にいれてはこべばええ。」

すると馬がいうのには、「水のはいった手おけはおもいぞ。そのおけ、だれがもつんじゃ。わしゃ、このとおり4本足やから、手おけなんどはようもてん。」

「なあに、そのくらい、わしがもってやるわ。」

サルが、気がるにひきうけたんで、馬もコイも大よろこび。

「すみませんな、サルさん。おせわになります。」

コイがいうと、馬も、「なんて気のよいサルさんじゃ。見なおしましたぞ。」と、しきりにかんしんしたって。

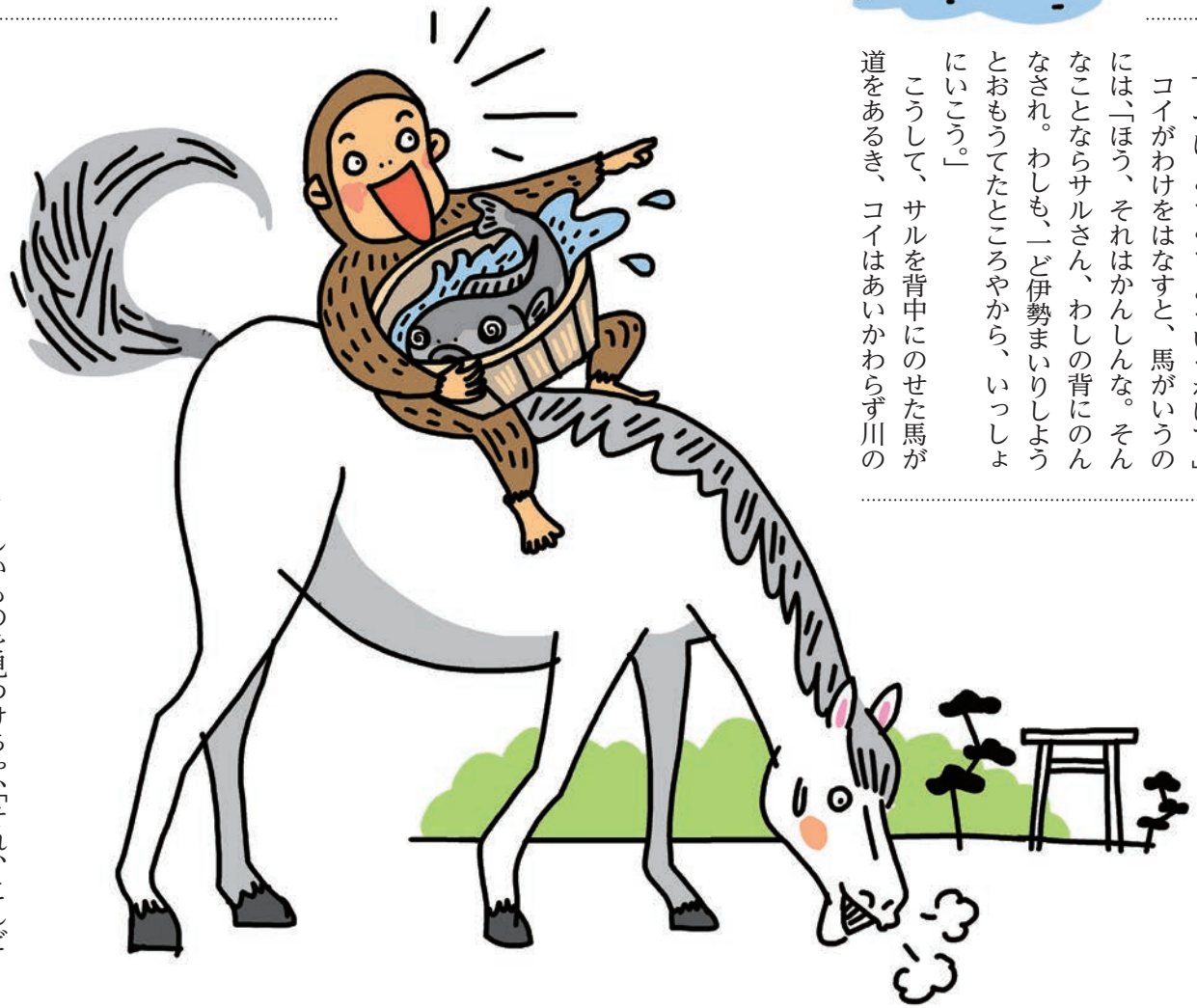
「なんの、なんの。それではみなさん、まいりましょうか。」

サルはそういうと、コイをいれた手おけをもって、ひょいと馬の背にまたがった。こうして三びきは伊勢めざしてあるいていったそうな。

でも、かんがえてみりゃあ、サルはただ手おけをもってるだけ。おもさはみんな、いちばん下の馬にかかるわな。

いちばんえらいめにおうたんは馬で、コイは、そとは見えんし、せまいところでゆられるもんだから、だんだんいきがくるしゅうなるし。だのにサルだけは、ながめはええし、街道のめずらしいものを見つけちゃ、「それ、こんどは右じゃ、こんどは左じゃ。」と、馬にさしずして、いい気ぶんじゃ。

それでも三びきは、なかよく旅をつづけて、ぶじ伊勢まいりをすませたそうな。



「すばらしきみえ No.2」昭和59(1984)年12月から

のしアワビ

【鳥羽市】

むかしむかし、志摩の国崎に、お弁という海女の名人がいてなあ。ある日のこと、お弁は、東の浜の一つ島あたりの海にもぐり、アワビとサザエをとっておった。

「磯の口が開いて、ええあんばいや。」

息いっぱい吸ってもぐっては浮き、またもぐりこむお弁。そのそばへ、舟が数艘近づいてきよった。倭姫命の一行や。金の髪飾りに金の扇子、倭姫命は、金色に輝いておられる。

命は、垂仁天皇26年(皇紀657年)、伊勢の五十鈴川の川上に、ご先祖の天照大神を祀る宮さんを設営する大業を終えなされて、舟で志摩地方沿岸を御巡幸しておられた。宮さんに供える贄として、珍しいもの、良いものはなかろうかと海をめぐり、篠島(愛知県)で鯛を、神島で伊勢海老を選びなさって、石鏡を通って国崎へ来たところやった。

海女の様子をご覧になった命は、身につけていた鎧を脱ぎ、舟を陸に着けさせると、浜の岩に腰をおろし、お弁がちょうど海から上がるときに、金色の扇子で招きなさった。

「もぐっては、あがって、またもぐってはあがって、そなたがとっておるのはなんじゃ。」

「アワビとサザエでございます。」

「ほほう。」

命はためしにひとつ、生のアワビを召し上がった。

こりこりと歯ごたえがあって、なんともいえんほどうまいので、舌づつみを打ちなさった。さっそく、海をめぐってきたわけをお弁に話し、ぜひともこのアワビを毎年宮さんへ奉納してくれぬかと申された。

「そういうことならば、とりたてのアワビを薄く長くはいで干したのもございます。生のままでは腐りますが、これなら長持ちいたします。」

命は、たいそう喜びなさり、生のアワビとのしアワビとサザエを奉納するよう申し渡された。

伊勢の大神宮さんに御贄を献上する神事は、いまも、国崎の大切な行事として続けられているがな、もともとは、お弁が納めもうしたのが、始まりや。お弁は、蜑御前として、「海士潜女神社」に祀られ、国崎の海女さんから守り神とあがめられてきおった。

また、倭姫命が、お弁のもぐりに目をとめて、鎧を脱がれたあたりを「鎧崎」、手甲を取られた島を「てこ島」、上陸して腰掛けなさった岩を「腰掛島」と名づけてな。

一行は焙烙や鍋も持って旅しておったから、「焙烙島」やら「鍋掛島」という名前もついたわな。

「すばらしきみえ No.92」平成11(1999)年10月から

櫛田の大ガメたいじ

【松阪市】

300年ほどむかしのことやそうな。

櫛田川ぞいの阿波曽、射和の村では、このところ、まい晩のように田畑をあらすものがあって、村人たちは、とんとこまっておった。

豆をまきゃ、ほじくられるわ。うえたイネは、ふみたおされるわ。ウリやナスやスイカは、たたきつぶされるわ。ときにはモモやクリの木までが、べしべしとへしおられてしまう。

「どこのどいつやおもうていたが、この大きな足あとは人間じゃないぞ。いったい、なにものじゃろ。」

村人たちが、たらいほどもある大きな足あとをたどっていくと、足あとは、櫛田川の川べりできえておる。

「こりゃ、でっかいかっぱじゃねえか。」

「いやいや、かっぱなら水かきがあるはずじゃ。これ、このようにつめのあとがついておるぞい。こりゃ、きっとおろちじゃ。」

「いや、おろちなら、とぐろをまくなり、うろこをたててはいずったあともありそうな。」

村のものは、首をひねるばかりやった。

それで正体をつきとめんと、村のわかものたちが、夜な夜な土手にへばりついて見はることになった。

夜の土手は人っ子ひとり、とおりゃせん。見はっているわかものたちの耳に、とおくの森でホーホーとなくフクロウの声がきこえてきた。

「やいやい、きみわるうなってきたのう。」

「ほんに、いったいなにがでてくるんじゃ、え。」と、おっかながっていると、ノッシノッシミシリミシリ……と、木や草をふみたおす音がして、土手のむこうで青白い大きな目がふたつ、ぶきみにひかった。

「ひゃあ。」わかものひとりが、ひめいをあげた。その目が茶わんほどにも見えたからじゃ。

ノッシノッシミシリミシリ……

なにものかが、土手をこえてせまってくる。まるで大きな岩がうごいてくるようじゃ。

わかものたちはびっくらこいて、正体を見きわめるどころか、あとも見ずに家ににげかえった。そして、かんぬきおろしてふるえておった。

それをきいた村人たちは、ますます、しごとも手につかん。

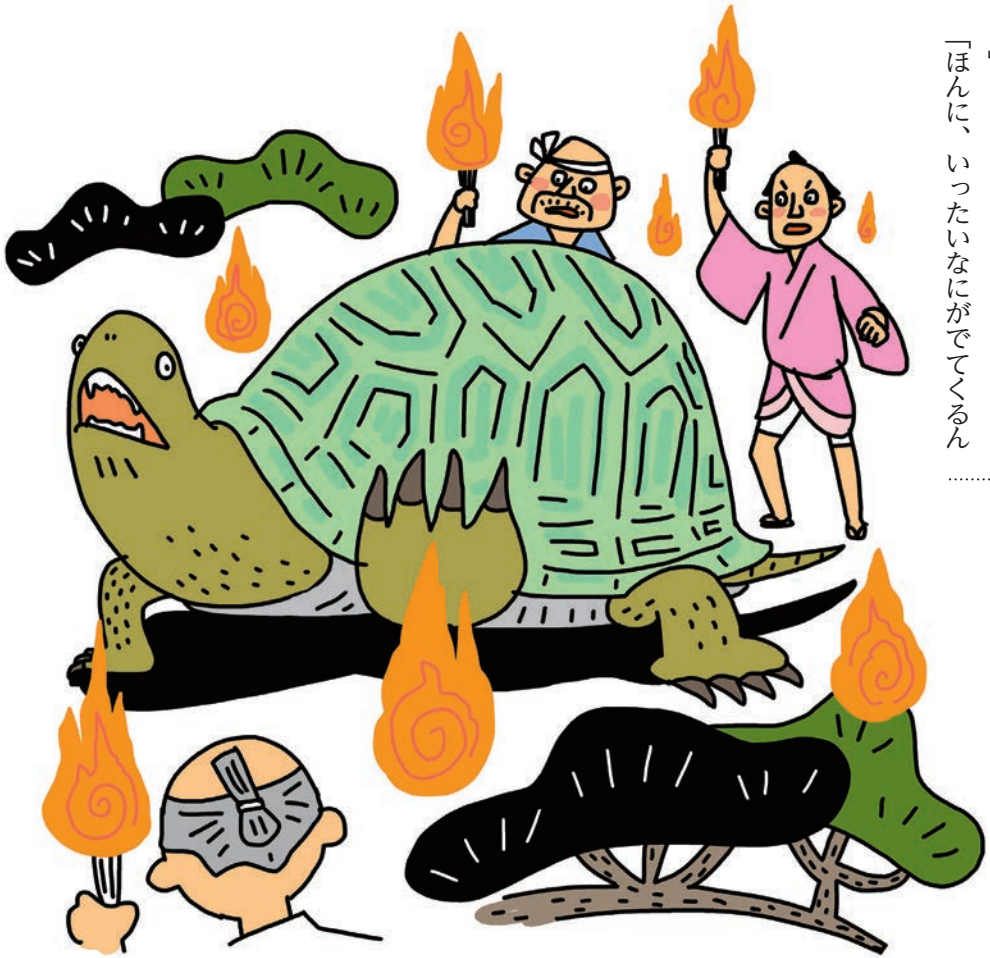
そんなある日、大明神山に日がしずみはじめるころになって、見しらぬひとりの坊さんが、村にやってきた。

見るからに、けだかく徳のありそうな坊さんだったので、村人が、「かくかくしかじか、とんとこまっておりまする。」と、うったえると、坊さんは、「それでは仏さまにねごうてみまする。」というて、村の薬師堂にこもられた。そして、食事もとらず、夜も昼もお経をよみつづけた。三日めになってようやく堂の中からでてきた坊さんは、村人につげた。

「薬師さまのおつげによると、村をあらすのは櫛田の川淵にすむ、大ガメのしわざとのことじゃ。すぐさま山の松のえだをとり、川岸につんでまつがよい。」

村人たちが、いわれたとおり松のえだを川岸につんで、夜のふけるのをまっていると、ノッシノッシミシリミシリ……と、川からはいだしてきたのは、なんとたたみ六じょうほどもある大きなカメであった。

村人たちは、松のえだに火をはなち、「ケヤ、ケヤ。」「ケヤケヤ。」と、大声をはりあげて、大ガメにおそいかかった。すると、さすがの大ガメも火の粉をあびて、〝これでは、とてもかなわぬ。〟と、しったのやろ。ドタ、ドタと川淵にきえていった。



それから村では、田畑をあらされることはなかったと。

この地方では、山の松のえだをとり、カメのかたちにして頭をおおい、「ケヤ、ケヤ。」「ケヤケヤ。」と、大声をあげて、村をめぐりあるくならわしを、つづけていたそうな。

「すばらしきみえ No.2」昭和59(1984)年12月から

長太（なご）のわたり

【鈴鹿市】

むかし、むかし。伊勢の国（いまの三重県中北部）の長太という、しずかな海べの村であった話じゃ。

ある日の夕がた、村人たちが浜にでて、あみのつくろいをしていると、ひとりのむすめが砂浜をあるいてきた。ここらじゃ見かけん顔やけど、にもつをもってるわけやないし、ひとえのきものにはだしというかっこうから見ても、旅人やない。だが、その顔だちのうつくしさといったらなかった。それにどことなし気品がある。

村人がぼうぜんと見まもっていると、むすめは、にっこりとわらいかけ、とおりすぎていった。ところが、そのうしろすがたを見て、村人はもっとおどろいた。

むすめのうしろすがたが、夕日よりももっと金色にひかりかがやいていたからや。それだけやない。むすめのあるいた砂浜の足あとまで、ぴかぴかにかがやいておるやないか。

漁師のひとりがおもわず立ちあがって、むすめをよびとめた。

「もし、むすめさん。どこのどなたかはぞんじませんが、これから、どちらまでおいでじゃ。」

するとむすめは、ゆっくりふりかえって、すずしい目で、その漁師を見つめた。だが、あいかわらずだまったまんまや。

「そっちへいっても、しばらくは宿屋のあるような町も村もありません。じきに日もくれましょうから今夜は、わしの家にとまりなされ。」

しんせつな漁師はそういって、その晩、むすめを家にとめてやった。

つぎの日、漁師は朝くらいうちに漁にでた。すると、その日にかぎって、かかるわ、かかるわ、たちまちのうちに、小舟がさかなでいっぱいになってかえってきた。

この漁師のうわさは、たちまち浜じゅうにひろまった。

「ここらへんの海で、あんなに大漁やったなんて、きいたこともないぞ。」

「これはきっと、あのむすめさんのせいや。」

「そうにちがいない。もしかすると、あのむすめさん、海の神さまのおつかいかもしれんぞ。」

「そうじゃ、龍宮のお姫さまにちがいない。今夜はひとつ、わしの家へとまってもらおう。」

「いや、わしの家にとまってもらうぞ。」

とうとう村の漁師たちのあいだで、むすめのうばいあいがはじまった。そこで、みんなでそうだんして、南長太（みみなご）の村と北長太（きたなご）の村でこうたいで、ひと晩ずつ漁師たちの家にじゅんぐりにとまってもらうことにしたそうや。

すると、やっぱり、むすめをとめた漁師の舟は、海にでるたんびに大漁じゃ。そうなると、もうたいへん。

「今夜は、南長太のわしの家が、お宿のばんじゃ。さ、はようきておくれ。」

北長太の村でとまっていたむすめが、まだ目をさまさぬうちに、南長太の漁師がつれにくるありさま。

こうしてむすめは、いつのまにか「龍宮さま」とよばれ、村の生き神さまのようにあがめられるようになった。

ところが、村にひとり、ひねくれもんがおった。朝から酒ばかりくらって、ぶらぶらあそんでばかりいる男やった。あるとき、このひねくれもんが、むすめにむかっていうたんやと。

「ははは、なんじゃ、ただのむすめやないかい。龍宮さまやいうのなら、海の上でもあるいて見せてほしいわ。」

それをきくと、むすめはにっこりわらって、海の中へはいっていった。そして、まるで砂浜をあるくように、海の上をあるきはじめたそうや。

むすめの足もとで波がきらきらかがやき、やがて、むすめのからだもひかりはじめた。それを見た、ひねくれもんの男は、いきなり海にとびこんだ。けれども、いくらひっしにおよいでも、むすめにはおいつかん。とうとう男のすがたは、波にのまれて、それっきり二どとうかんでこんかったそうや。

龍宮さまのおかげで、どの家も大漁がつづき、長太の村はすっかりゆたかになった。そんなある日、きゅうにむすめがいいだした。

「長太のみなさん、ながらくおせわになりました。みなさんのしんせつな心にひかれて、この村にとどまっていましたが、そろそろ龍宮へかえらねばなりません。」

「いかんでくだされ。いつまでも、この村におって、わしらをまもってくだされ。」

村人たちは、ひっしにとめたが、むすめは、「せっかくなかよくなれたみなさんとおわかれするのは、ほんとうにさびしいのですが、わたしは海の世界のもの。これいじょう人間の世界にすむことは、ゆるされないのです。」と、くりかえすばかりだった。

いよいよ、むすめが海へかえる日、村人たちは、ひとりのこらず浜へでて見おくった。

「龍宮さまあ、龍宮さまあ。」

「さようならあ、いつかまた、この浜にもどってきてくだされよう。」

金色にひかりかがやく輿（こし）（むかしののりものの一種）にのって、しずかに海の上をわたっていくむすめにむかって、村人たちは声をかぎりにさけび、いつまでも手をあわせておったと。

「長太のわたり」として、つたわるものがたりじゃ。

「すばらしきみえ No.26」昭和63（1988）年12月から

十六地蔵

【いなべ市】

むかし、夏のあついさかりやったと。

旅の坊さんが本郷村へやってきて、「すみませんが、水を一ぱいいただけませんか。」と、ていねいにたのんだそうな。

「水かい、ほら、この水ならやるぞ。」

村のある男が、ついめんどうくさがって、水がめのそこにのこっていた、赤いウジのわいた水をさしだしたと。すると、その水をのんだ坊さんは、はらいたでもおこしたのか、きゅうにくるしみだし、その場で死んでしまった。

それからというもの、本郷村では、どの井戸からも赤いウジのわいた水しかでなくなった。さあ、たいへん。

「こりゃ、あの坊さんのたたりや。」「そうや。赤いウジのわいた水をやるなんて、ばちあたりなことをしたからじゃ。」

そこで、村人たちは、坊さんの霊をなぐさめるために、村の辻に大きな地蔵さんをたてた。そして〝辻のお地蔵さん〟とよんで、たいせつにおまつりしたそうな。

それからなん年かたって、ある年、ひどい日でりがつづいたことがあった。田や畑は、からからにひからび、川の水も、ながれなくなってしまった。

「こんなひどい日でりは、わしゃ、はじめてじゃわい。」

88才になる村いちばんの年より、源平じいさんまで、そういったと。

「こうなったら、天白池の水をひいてくるしかない。」

天白池というのは、村の西の山すそにある池のことで、一年じゅうきれいな水がわいていた。しかも、ながれこむ川もなければ、ながれでる川もないのに、ふっても、てっても水かさはかわらない。

じいさんは、この水を村までひこうというのだ。

まず、池の水を本郷川へおとして川の水と合流させ、そこに井せきをつくる。その井せきから村まで、あたらしい水路をほる。天白池から村までは、まっすぐはかっても3キロいじょうあった。たいへんな工事だが、村の人たちの生きる道は、これしかなかった。

「やろう。みんな、わしについてこい。」

源平じいさんが、まっさきにくわをとった。村の人たちは、男も女も、年よりも子どもも、その年の秋から工事にかかった。

つぎの年の4月、やっと水路が開通した。さあ、こんどは井せきづくりだ。

川原にふといくいをうちこむ。山から雑木をきってきて、くいのあいだにはさみこむ。そのまわりに川原の石をひろいあつめて、つみあげる。井せきづくりは水路より、なん倍もくろうしたが、村の人たちはけんめいにはたらいた。

5月、やっと井せきができあがった。さあ、田うえのじゅんびだ。村はきゅうにかっきづいた。

その年は大豊作になった。源平じいさんでさえ見たこともないという大豊作だった。

本郷村では、こうしてできあがった天白井水を、それぞれのやしきへひきこみ、のみ水につかい、米をとぎ、やさいをあらった。

日でりがつづいても、田の水をしんぱいしなくてもすむようになったし、本郷川から水をくむつらいしごともなくなった。村の人たちは水のくろうをすっかりわすれてしまった。

ところが、それからまもないある年。

大雨になった。風もでた。村の人たちが、ひと晩じゅうねむれないほどの大あらしだった。あけがた、村のお寺の半鐘がなりひびいた。

「天白井せきがきれるぞう。」

風にのって、そんな声がながれた。

井せきのまん中に大きなあながあいて、そこから水がもれはじめたのだ。石、山の松の木、じぶんの家ののき石まで、村の人たちは手あたりしだいに、井せきにあいた大あなへなげこんだ。

それでも、あなはふさがらない。

「もうだめだ。」「こうなったら、辻の地蔵さんにたのむよりほかない。」

村の人たちは、いっせいに坊さんの霊をなぐさめるためにたてた地蔵さんを、かついできた。

「わっしょい、わっしょい。」「辻の地蔵さん、おねがいします。」

地蔵さんの大きなからだが、うずまく水の中へなげこまれた。とたんに井せきのあなは、ぴたりとふさがった。やがて雨もやみ、青空が見えはじめた。井せきはたすかったのだ。

ところで本郷村には、そのころ16けんの〝おもや〟があった。おもやというのは分家にたいする本家のことだ。

これら16けんのおもやでは、井せきをすくってくれた地蔵さんの恩をわすれないようにと、1けんに1体ずつ、あたらしい地蔵さんをまつった。

16体の地蔵さんは、ひとりひとり、みんなちがう顔をしてござった。おもやの主人は、やしきをながれる天白井水のわきにたてられた地蔵さんに、まい朝、井水の水をそなえ、手をあわせておがんだ。

その後、「十六地蔵」は6体しかのこっていない。水でくろうする人たちが、とおいところからやってきて、ぬすみだしていったからだといわれている。

上水道ができたのちも、天白井水は村の中をこんこんとながれ、のこされた6体の地蔵さんのまえには、年じゅう、おそなえの花がたえないと。

「すばらしきみえ No.26」昭和63(1988)年12月から

へぐりいけ

【桑名市】

むかしむかし、大きなお山の奥に、小さな小さな家がありました。そこには、九左衛門（きゅうざえもん）というおじいさんが、たった一人で暮らしておりました。おじいさんは、毎日、毎日、朝早くから夜おそくまで、山で、けものをとって、暮らしておりました。

ある日、おじいさんの家へ、一人の男の人が、たずねてきました。

「もしもし、おじいさん、この近くの平群池（へぐりいけ）へ五位（ごい）さぎという珍しい鳥が来るそうな、知っておいでかな。」

「へえー、五位さぎだと、そんな話は、はじめて聞いた。」

その夜、おじいさんはそんなに珍しい鳥ならばつかまえてみたいもんだと、一人で考えておりました。そこで、あくる朝、目が覚めるとすぐに、鉄砲をもって平群池へ向かいました。おじいさんは、五位さぎとは、どんな鳥なんだろうといろいろ考えながら、山道をてくてく歩いて行きました。

やっと平群池へ着きました。おじいさんは、そっと池の様子をうかがってみました。あたりは、シーンと静まり返って何も聞こえません。そこで、おじいさんは草むらの陰へ、そっと身をひそめて、待つことにしました。

しばらくすると、池の方から、バタバタ、バタバタという音が、かすかに聞こえてきました。おじいさんは、ハッと息をのんで、耳をすませました。

バタバタ、バタバタ。

今度は、はっきりと鳥のはばたく音が、聞こえました。おじいさんは、胸がドキンとしました。おじいさんは、草むらの中から、そっと池をのぞいてみると、大きな羽をいっぱいに広げた、まっ白な鳥が一羽まいおりてきたところでした。

「あっ、あれが五位さぎに違いない」と思い、鉄砲をにぎりしめました。そこで、ねらいを定め、引き金を引こうとした時、突然、目がくらみ、ザブンと大きな音を立てて、池の中へおじいさんは、すべり落ちてしまいました。その音におどろいて、五位さぎは、逃げてしまいました。池の中では、おじいさんが池のへりにつかまろうと、もがいておりました。やっとのことで、木の株にしがみつき、池の中から、はいあがった時、おじいさんの懐の中で何かが、ピクピク動きました。恐る、恐る、懐の中へ手を入れてみると、なんと大きな鯉が、5匹も入っておりました。

「これは、思わぬところで、いいものを見つけたわい」とおじいさんは、懐を手で押さえながら、木の株に腰をおろしました。すると、木の切り株は、ピョンと動きました。おじいさんは、びっくりして、尻もちをつくと山うさぎが、あわてて地面をけって逃げてゆきました。おじいさんが木の株だと思っていたものは、なんと山うさぎだったのです。そして、山うさぎのけった地面の中からは、山芋がたくさんとれました。

おじいさんは、こんなに思いがけないものが、たくさんとれたので、心を入れかえ、それからは生き物をかわいがり、五位さぎを大切にするようになりました。

「すばらしきみえ No.92」平成11（1999）年10月から

2020年8月発行〈偶数月15日発行予定〉企画／編集／RON　印刷／新日本工業株式会社　発行／百五銀行　経営企画部広報ESG課
津市丸之内三二―二一

表紙・裏表紙　イラスト：柚木 美里　撮影：梅川 紀彦

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧いただけます。
問 経営企画部広報ESG課　TEL 059-223-2326（要予約）

禁無断転載

百五銀行
FRONTIER BANKING

FSC www.fsc.org
ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C018061